

# 百済の武王（薯童）物語の歴史的背景

大分県三重町・APUと韓国との地域交流の展望

韓国圓光大学 羅 鐘宇教授（文学博士）

## 1．はじめに

益山地域は早くから交通の中心地、軍事上要衝地、また産業上の重要な地域として注目。

この地域は古代国家の都邑地と関連し、たくさんの説話が伝えられてきた場所。特にこれと関連し、百済の武王と関連した薯童説話は古代益山地域の性格を究明することができる文化的総量。

古代において百済と日本は密接な関係。特に九州とは深い関係にあり、そういう意味で真名野長者物語と武王（薯童）説話が類似するというのは過去の交流史を考える上で重要。

## 2．泗沘（扶余）時代の支配勢力の変遷と益山

### 1）支配勢力の変遷と管山城戦闘

百済は建国以来何度も首都を移転した。

漢城 熊津（公州） 泗沘（扶余）…（益山）…泗沘（扶余）

遷都理由は都に縁故を持つ在地勢力を政治に参加させ、支配勢力を再編成、政治上の改革のため。戦争で王様がうまく対応できなかった場合は貴族たちに責任を追及される。

泗沘（扶余）遷都もこの理由からである。

- ・538年： 聖王（523~554）16年（538）首都を<sup>こんじゅ</sup>公州から扶余へ、仏教を奨励、新羅の真興王（514~540）と同盟を結んで失った漢江地域を奪還。
- ・553年：高句麗と組んだ新羅の攻撃で漢江地域を再び失う。百済が回復した6城占領。
- ・554年：管山城戦闘で聖王とたくさんの兵士が死ぬ。

### 2）管山城戦闘後の益山の位相

内憂外患が深刻。

百済史からみると、管山城戦闘は非常に重要な歴史的境界線の一つになる。王権に反対する貴族勢力を押さえ王権を強化し、王を求心点として政治を行うためには、戦争という方法が最も早く確実であった。こうして威徳王8年(561)には新羅を攻撃したが1千人を失った。そして、新羅で真興王が死んで真知王が即位すると、王24年(577)に再び新羅を攻撃したが3千7百余人の戦死を伴う惨敗であった。そして、かえって新羅の報復によって、翌年(578)には百済は閼也山城(現、益山市なんさん面)が攻め落とされる。貴族たちの責任追及はいちだんと強くなる。

王権に危機を感じた威徳王は敵国である新羅に、屈辱的であるが王室間の婚姻を請うようになった。こうして、閼也山城の戦いの翌年である579年(百済 威徳王26年、新羅 眞平王 元年)、王族で益山に住んでいた威徳王の弟の孫である、当時おおよそ16歳の薯童(後に武王となる)と眞平王の三番目の姫である善花との結婚が成立した。

当時薯童が益山に住んでいたとされるのがどのように説明されるのか。

まず、文献的な系譜上からみると、威徳王の次に王位を継承する恵王は、彼の弟である。そして、

恵王の息子が法王であり、法王の息子が武王である。威徳王が死んで、598 年 12 月 70 歳といった高齢の恵王が即位したが、その翌年には彼もこの世を去り、法王がその後を継いで即位したが、やはり翌年である 600 年に死亡する。

この過程をもう少し詳しく見てみると、威徳王末年の 598 年、新羅の韓河流域の占領にもかかわらず、交通路に沿って奇襲戦を指導した高句麗軍の突然の百済侵攻に、百済朝廷は大きく動揺した。

当時百済は高麗の威徳王末年期であり、国王の統治力が衰退し、太子である阿佐は倭国に渡っていった状況であった。戦争を主導的に導いていく勢力が明らかでなかったのに、百済は高句麗軍の侵攻を撃退した。

おそらく当時、この戦いは威徳王の甥であり恵王の息子である孝順(後に法王)によって主導されたとみられる。孝順は高句麗が攻めてきた一年後である 599 年に戦勝の怨恨のため、鳥合寺を創建した。鳥合寺は百済王室の格別な配慮下に創建された護国願刹であった。

鳥合寺が孝順によって創建されたということについて暗示されることは多い。戦争が終わった 3 ヶ月後、威徳王の弟である恵王が 70 歳を過ぎる高齢の年で、威徳王の息子である阿佐太子が存在したにもかかわらず即位するようになった。これは、どこか不自然で、孝順の政変を考えられる内容である。すなわち、高句麗の侵攻を主導的に撃退した孝順が政治の実権を握り、当所の貴族たちの反発も考慮し、高齢の年であった父親の恵王を、一応即位させたことが考えられる。

孝順はどんな人物であったのか。(今まであまり名前が登場しなかった孝順が登場する背景はなにか)

この問題に移るためには、サビ遷都後に益山に対する王室の認識を先に見る必要がある。サビ遷都後、中央と地方の制度を整備したが、組織の改編だけで中央の有力な貴族たちを統制できなかった。

そうして、国王は経済力と軍事力を確保している地方の、有力な勢力との友好関係を特に維持しようとしたはずである。

このような観点から、益山は非常に注目できる地域である。旧馬韓勢力を懐柔し王権を伸張させることができ、湖南地域の確実な支配を通じた経済力の確保、連続して侵略してくる新羅に対する確実に牽制できる軍事的要衝地、そして、中国と日本に行ける関門として重要な地域であることには間違いなかった。

こうして、早くから益山地域は王室の第一関心地域である。このような観点からみると、武王が王になる前、益山地域の檐魯長として、湖南平野の肥えた農業地から収穫でききる経済的な富を土台とし、政治的基盤を固めていったという見解は妥当であるといえる。(このような事実は益山イプチョムリ古墳の被葬者が佐平、または率係官等を所持した者として推測するとき、より確実となる。

管山城戦闘で敗北して以来、威徳王は有力な勢力と手を組んだことにより、中央の貴族の干渉に対する王権維持方便としたことが考えられる。こうして、若く知略にたける英明な甥である孝順(後の法王)に益山地方の統治を任せただと考えられる。益山地方におりてきた孝順は土着勢力と融合をたくらみ、堅固な支持勢力を得て基盤を築き上げたと考えられる。そして時期がきたら、王室を悩ます貴族たちの根強いサビから、この益山へと都を移すことを考えながら、着実に

計画を実践に移していった。よって長い間益山だけで生活してきた孝順は中央には知らされなかったのである。これはまるで王位に上がる前の、益山のタンロジャンと信じられる武寧王の若き日の行跡が全く明らかではないのと同じである。

こうして彼の出番が訪れた 598 年が、高句麗が侵入してきた年であった。先に述べたように、当時威徳王は 74 歳という高齢であり阿佐太子は倭国に渡っていた。彼は率いて行った軍隊と中央軍を指揮し堂々と侵略軍を撃退させた。3 ヶ月後、威徳王が死ぬと真っ先に機会を捕捉し、まずは 70 歳の高齢の父親を即位させるようにした。しかし、父親である恵王が在位 1 年もせず世を去ると、太子であった孝順が王位に上がり法王となった。こう考えると孝順の登場と即位は劇的な要素があるように思われるが、実際には彼は予め準備された王であったのだ。そして彼はその準備過程を益山生活で、益山の土着勢力、仏教勢力との連合から育てていった。

### 3．武王と益山

#### 1) 武王の出生と善花姫との結婚

武王の出生と成長について文献の記録を見てみると

A．三国史記を見ると“武王の法王の息子であった。風采が英明であり、体格が大きく志気が豪放で気性が傑出していた”となっている。

B．三国遺事を見ると“武王の名は璋という。その母は寡婦であり、ソウルの南側にある池のほとりにある家に住んでいた。その池の龍との間にできた子が武王であり、幼い頃の名を薯童という。彼の才能と人柄は量りきれなかった。いつも薯蕷(長芋)を掘っては売り生活したことで、人々は彼を薯童と呼ぶようになったという。”となっている。

C．龍泉：薯童が五金山のふもとに住んでいるとき、この井戸水を飲んで育ったと言われる。

D．馬龍池：馬龍池は五金山の南側から百余歩のところに位置する。薯童大王の母が家建てたところであると伝えられている。

E．五金山：世に伝わるには薯童が薯を掘り母を養うときに、金を 5 つ得たので山の名が五金山となった。

C、D は再考の必要がある。

上の記録によると、まず、彼が法王の息子であるという家系を考える必要がある。

ほとんどの武王に関する研究は、彼が幼い頃は寡婦の息子として貧しく暮らしたという三国遺事の記録に偏っていて、正史である三国史記の記録を見逃してしまうことが多い。三国史記には明らかに法王の息子であると載っている。そうだとすると、この二つの記録をどう理解すべきか。

先述したように、法王は若くして益山地方の統治を受け持ち行ったが、当時その土着勢力の娘との間にできた子が薯童であると言えるのではないか。薯童が育つにいたって、主に母親と生活したのが多く、寡婦の子であると言われているが、実は父親である孝順(法王)が益山の土着勢力と手を組むために、土着勢力の娘を迎えたことも考えられる。

彼の母が龍と交わったというのは、龍は王を象徴するため、王族と交わったと理解できる。

上の記事から一つ考えられるのは、五金山と馬龍池の位置についてである。

次に善花姫との出会いと結婚について、三国遺事の武王編を通して見てみると

薯を掘って暮らしていた薯童が、新羅の真平王の三番目の姫がずば抜けた美人であるという噂を聞き、新羅のソウルに行き童謡を作っては子供たちに詠わせた。その童謡の内容が宮廷にまで知られ臣下たちが王に懇請し、結局それが姫を流刑にしてしまうようになる。去り行く姫に王侯は純金一升を路資として持たせた。姫が流刑にされたとき、薯童と出会い同行した。姫は、偶然に会った薯童を信じては喜んでついて行った。後に薯童の名を知り童謡の内容も知ることになった。二人は百済で暮らしたが、その生活は苦しかった。ある日、姫は母親からもらった純金を出して生計を立てようとする、薯童はその純金を見るや否や大笑いし、自分が薯を掘る山にはそれが土塊のように積んであると言ってみせた。善花姫は思いもよらない量の黄金に驚いて、その黄金を知命法師を通して新羅の宮殿に送った。その後、真平王は神秘的な変化を疑い、常に安否を聞くようになった。そうして薯童は人心を得て王位に上がるようになった。

この説話を通して理解しようとするためには、当時の百済と新羅の両国の関係がどうあった時期なのかを知らなければならない。また、結婚する当時の薯童の年齢と、結婚を通して両国が得ようとしたものは何であるのかを考える必要がある。

それは先述したように、およそ 578 年の秋頃であったとみられる。その年の 7 月、新羅が百済の閼也山城にまで攻撃し陥落させたときであった。首都サビの目前にまで迫ってきたことによって、百済の王室では、先に急な危険を消すため政略的な結婚を考えるにいたった。そして、当時の交渉の役割は知命法師が受け持っていたといえる。積み重ねられた黄金は、孝順(法王)が将来のサビへの遷都を考えながら集めておいたものと考えられる。また、黄金を新羅宮廷に送ったのは、善花姫を連れてくるための財貨として送ったものであったとも言える。

孝順(法王)は息子(薯童)を新羅王室と婚姻させることで、中央政界において発言権を持つきっかけとなったが、これはどこまでも文字通りの政略的なものであったということが、後に露わになる。当時薯童の年齢は 16,7 歳くらいであり、自らの決定で結婚できるという状況でもなかった。

## 2) 弥勒寺の創建と益山

まず、三国遺事の弥勒寺創建とかかわった記録をみると、(薯童が王になった後)ある日、婦人と一緒に獅子寺に行く途中で、龍華山のふもとの大きな池の近くに来ると弥勒三尊仏が池の中から現れたので、御輿を止め敬拜した。婦人は王に「ここに大きなお寺を建ててほしい」と言った。王は許可し知命法師のもとへ行き、池を埋めることを相談すると、神道力によって一晩の間に山を崩し、池を埋め、平地を作った。弥勒三尊仏と會殿、塔、廊、廡を各三ヶ所に建て、寺名を弥勒寺とし、真平王が多くの工人を送り助けた。

上の文から見てみると、王が知命法師を訪ねて行ったことがわかる。王となる前にも訪ねたが、王となり再び訪ねたということになる。それは益山地域の仏教勢力の支持を確実に得ようとしたからである。知命法師は当時、益山地域の仏教の代表者であったのだ。

このとき、サビは弥勒上生信仰が主流であったが、益山地域では弥勒下生信仰であった。上生信仰と下生信仰はどんな差があるのか。弥勒上生信仰は貴族的であり、下生信仰は庶民的であった。

龍華山は『弥勒下生』に出てくる龍華樹を象徴するものである。また、弥勒三尊の出現も単純

な靈驗の表現ではなく、百済の弥勒仏の出現を意味するといえる。

弥勒三尊仏の出現は益山地方が、弥勒が下生する希望の地だということを示すものであり、この地域の民衆たちと一つになるということの意味する。法王や武王が考えた理想世界の建設は、正に益山地域のこのような民衆の弥勒下生信仰と密接な関わりがあることが考えられる。

益山の民衆たちはどんなものたちであったのか。最も自我意識が強かった者たちであったことは、新羅の文武王が高句麗を滅ぼした後、百済地域、特に金馬にある百済遊民たちが反抗、抗争してきたため、彼らを鎮圧するためにも、ここに高句麗の貴族出身であるアンスンを高句麗王として配置したという事実からも分かる。

早くからこの地を新しい都として築き上げてきた法王と武王は、その民衆と仏教指導者たちに、本人が王となり、新しい世界が開けたら首都建設と共に、彼らのために大伽藍を建てたいという公約をしたのである。

### 3) 王宮坪城の運営と益山遷都 4・6世紀の益山の支配勢力と熊浦の役割

熊浦はその元の名は「コムゲ」で、益山の西北側に位置し、すぐ前を錦江が流れている。この熊浦面の笠店里からは横穴式 石室墳1基と石槨墓7基が発掘された。この中で注目されているのは一号古墳である。

笠店里古墳は、穹状天障石室墳として百済の横穴式古墳の中で最も早い時期のものの一つだとされ、その時期を5世紀末から6世紀初葉であるとみる見解が有力である。

笠店里古墳の被葬者に関しては様々な意見があるが、その中の一つは当時百済の地方官制である22擔魯の中で一つの地域で、その支配者であったとみる見解が有力である。

このような事実は笠店里一号古墳から出土した金銅冠帽、金銅飾履をはじめとする遺物から、中央から派遣された貴族や王族と関連した勢力であるということが、文献資料を通して立証できるからである。

しかし興味深いことは、ここから出土した遺物が、日本の玉名市にある船山古墳から出土されたものと同じ形式であるということである。特に、冠と履物は勝手に着用できるものではなく、身分の指標であったという点から考えてみると、このような事実は、当時二つの地域の被葬者たちがどんな形態にしる、何か関係があったということが暗示されているといえる。

一方、百済は538年(聖王16年)サビに遷都した後、昔の熊津の貴族勢力から抜け出すため海外へと出る関門を、熊津から熊浦へと移したことが考えられる。実際には西海岸に出て日本や中国に行くためには、熊津が熊浦よりもより便利な点が多い。そうだとしたら、サビ遷都以降の日本との関係は、ここを通して交流があったということも考えられる。

羅教授によると、大分県三重町の古墳から出土した副葬品の馬具は、益山にある百済時代の古墳から出土したものと、全く同一のものであるとのこと。韓国益山地方と我が三重町の古くからのつながりを彷彿とさせてくれます。

文責；三重町企画振興課